

絹 需 要 拡 大 の 道

東京都立繊維工業試験場 編織技術部長 平 栗 昇

1. ま え が き

先染織物の産地として発展してきた八王子産地では、きもの需要の衰退にともない、新しい活路を求めて洋装分野への転換が進められている。こうした中で取り組まれてきた絹混用の紳士服地開発の問題点と、今後の絹需要拡大の方向について私見を述べ、ご批判を仰ぎたい。

2. 八王子産地の現状

八王子産地は、男女着尺地とネクタイ、マフラーを主力製品とする先染織物の産地である。しかし、最近の消費者のきもの離れ傾向の中で、とくに実用呉服の消費が大幅に減退してきたことから、新分野への展開が積極的に進められている。男物着尺の技術を活かした紳士服地の開発、地の利を活かしてのファッション素材の開発など、真剣に取り組まれており、徐々に洋装産地へと変貌しつつある。しかし、都心から1時間足らずという地理的な便に恵まれている一方、地価や人件費が割高であることから、コスト面で不利であり、高付加価値製品を目指さなければ先進産地の既存商品と競合し、後進産地として新しい市場の開拓は困難である。

現在生産されている八王子製紳士服地は、一部正絹もののほか、絹を10～60%羊毛と混用したシルクウール製品が主体であり、「エイトテックス」の商標で発売中である。絹を混用していることから軽くて暖かいこと、紋織組織による柄行きの斬新さが特徴となっている。

このほか、綿、麻、化繊を用いた婦人服地も手掛けられており、最近は高級化指向に沿って絹を用いた婦人服地も開発されつつあり、一部の企業では本格的に取り組み始めている。

3. 絹 服 地 の 問 題 点

洋服地は着物地にくらべて着用頻度も高く、機能性が強く要求される製品である。こうした製品に絹を用いたときの問題点は、

- (1) 整理加工での縮絨加工が難しい。
- (2) 生地の変縮性が小さいので、縫製のとき、いせこみがしにくい。
- (3) アイロンによるアタリ、テカリが出やすい。
- (4) 耐摩耗性が悪い。とくに湿摩擦、折り切れ、スレなどが起りやすい。
- (5) しわになりやすい。
- (6) ラウジネスが発生しやすい。
- (7) 目寄りがしやすい。
- (8) たて筋が出やすい。
- (9) 外観保持性が悪い。
- (10) 原料コストが高い。

などが考えられる。今後は絹の良さを生かしながら、これらの問題点をいかに改善するかが、絹服地の商品化を進めるうえでの大きな課題である。

4. 絹の良さとは何か

絹の特徴は、風合い、光沢、染めの鮮かさ、優美さ、軽くて暖かいなど、いまさら述べるまでもないが、これ以外に言葉では言い表わせない良さを持っているように思える。

合成繊維の中にも、いわゆるシルクライク繊維として、外觀的にも風合い的にも絹に類似した繊維が作られており、価格も絹にくらべて極めて安価であることから、絹に取って代ってもよさそうに思えるが、和装の分野では、絹に対する魅力は相変わらず根強く、正絹物を求める声は強い。

こうした絹製品への魅力とは一体何であろうか。……

これは単に風合い、外觀、物性といった外面的なものではなく、多分に精神的なものにあるように思える。シルクロード以来 3000 年の歴史の中で培われてきた絹へのあこがれであり、高価でも本物であるという自負心ともいえるものではなからうか。

とにかく、絹は繊維の中の王様であり、絹に対する魅力は今後も变りなく、素晴らしい繊維であることは間違いない。

5. 絹の需要を阻む要因

このような素晴らしい繊維が、なぜもっと多く使われないのだろうか。それには、つぎのような 3 つの大きな要因が考えられる。

(1) 絹がきわめて高価である。

キロ 15,000 円以上となると、織物業者の立場からすると、どうしても手が遠くならざるを得ない。せめて、中国産生糸の原価まで下がれば、使いやすくなるし、また、絹織物の国際競争にも太刀打ちでき、需要も大幅に拡大することは確かである。一元化政策が撤廃されても対抗できるよう養蚕農家の生産性を高めることは不可能なのだろうか。

(2) 生糸が服地、ニット向きに作られていない。

今の生糸は、和装向きにすべてが作られており、薄地ものにはともかく、少し厚地の服地や、ニットには嵩高性、弾力性が乏しく向かない。洋装向きの新しい繰糸生糸の開発が望まれる。

(3) 服地素材として実用性能に難点がある。

和装にくらべて着用頻度が高い洋服素材としたとき、3 で述べたように、とくにしわ、スレ、伸縮性、耐摩耗性など実用性能にやや難点がある。

6. 絹需要拡大の道

(1) 着物消費の拡大

絹の用途の 90 % は和装用であるといわれている。この面からすれば、何んといっても絹の需要を拡大するには、着物の消費を拡大することがもっとも即効的であることは確かである。それには着物をより身近かなものにし、着物消費人口を育てることである。そのためには、

- ① 現代感覚に合った着物、着物のカジュアル化の検討
- ② 着物価格の適正化、呉服の流通機構の近代化
- ③ 着物の既製化
- ④ 生産者と消費者の距離の短縮化

など、呉服の伝統性の中で取り残されてきた古い因習が払拭されなければならない。

(2) 洋装分野への需要の開拓

着物の消費拡大こそが絹の需要拡大の本命であるが、今後、再び着物ブームというものが訪れない以上、絹の用途を和装に限っていたのでは、絹も和装と同じ運命を辿らざるを得ない。この際、着物の分野から脱皮して、洋装の分野へより積極的に展開を図ることが、絹の需要拡大の新しい道を開くのではないかと考える。それには、

① ふっくらとした弾力性のある服地向き、ニット向きの生糸の開発。

② 他繊維との複合化による機能性の向上と、コストの低減化。（後述）

が考えられる。

(3) 繭の生産性の向上による生糸価格の引き下げ。

7. 複合化のねらい

一般に、繊維製品に対する消費者の要求品質は、

(1) 機能的なもの……強さ、扱いやすさ、着やすさなど

(2) 視覚的なもの……色、柄、デザインなど

(3) 感覚的なもの……手触り、風合い、着心地など

(4) 精神的なもの……本物である、高級品であるという着たときの満足感

など、段階的に分類され、実用品ほど機能的なものが強く要求され、高級品になるほど精神的なものへの要求が強まる傾向にある。この点、絹は高級品的なイメージを高めるには格好の素材であり、手触り、風合いの面でも最高の繊維である。しかし、機能性も強く要求される服地素材として絹を用いた場合、先に上げたような問題点もあり、價格的にも限界があるように思える。

こうした問題点を解決する一つの方策として、他繊維と絹との複合化が考えられる。用途に応じて各種の繊維と複合化することによって、絹の欠点を補うと同時に、コストダウンを図り、そのうえ、絹を用いていることにより高級品のイメージを与えることができるなら、市場性も得られるものと考えられる。

今後は、正絹物にこだわることなく、消費量が圧倒的に多い洋装分野において、例えば10%でも20%でも絹が混用されるようになれば、絹の消費も大幅に拡大するものと考えられる。そのためには、絹と他繊維との複合化技術の研究があらためて必要となってくるものと思う。

天然繊維同志、合成繊維同志、天然繊維と合成繊維など多くの複合繊維がすでに開発されている中で、絹を用いた複合繊維の研究は、戦時中に一時行なわれた以外、あまり手掛けられていない分野である。しかし、製品化のためには、素材の組合せ、複合構造、複合効果、コスト、製造方法、後加工への影響など複合化に伴う研究課題は多い。